Journal of Hyogo University of Health Sciences. Vol. 8, No. 2, pp.23-27, 2020

実践報告

作業活動学実習（陶芸・生け花）とコミュニケーションスキル

坂本浩、伊藤斉子、有吉正則
兵庫医療大学リハビリテーション学部

The Japanese Pottery and the Flower Arrangement of the Occupational Therapy Activities Practice for the Student Communication Skills

Hiroshi SAKAMOTO, Masako ITOH, Masanori ARIYOSHI
School of Rehabilitation, Hyogo University of Health Sciences

抄　録

本校の作業療法学科では1年次後期に作業活動学実習Ⅰとして、陶芸と生け花を取り入れている。実習の目的は作業工程を学ぶだけではなく、3年次・4年次に実施される臨床実習のためのコミュニケーションスキルの向上のため、健常高齢者と学童への指導体験を設けている。今回、2019年度全学FD・SDワークショップ（テーマ：多様な学生に対する教育や指導のあり方について）での実践報告の機会を得て、実習の構成、作業活動の特性、学生への振り返りアンケートによる結果を報告した。アンケートの結果では、実習に対する不安の改善や自身の変化が反映されており、異なる世代への作業活動指導体験は有用であることが示唆された。

キーワード：作業療法、作業活動学実習、コミュニケーション技能

Ⅰ　はじめに

学生の臨床実習に対する不安の1つに、異世代とのコミュニケーションに対する不安をよく耳にするが、実習に対するストレス反応は経験を積むことで解消されるという報告もある[1)]。そこで、作業療法学科では、1年次より異世代とのコミュニケーションに慣れることを目的として、1年次後期科目である、作業活動学実習Ⅰで行っている陶芸活動、フラワーアレンジメントに近隣の健常高齢者と学童クラブを招聘し学生の指導体験を行っている。今回は2019年度の作業活動学実習の紹介と振り返りアンケートの結果について考察を加えて報告する。

Ⅱ　実習の概要

実習は学生（39名）をA・Bの2グループに分けて実施し、Aグループでは陶芸家による基礎講義とデモンストレーション、作業療法学科教員による陶芸工程の実習後、高齢者指導体験実習を実施し、その裏でBグループは作業療法学科教員による活動分析実習、フラワーアレンジメント実習後、学童への指導実習を実

受付日：2020年7月17日　　受理日：2020年11月2日
別冊請求先：坂本浩　〒650-8530　神戸市中央区港島1-3-6　兵庫医療大学　リハビリテーション学部

施した。中間（12コマ）で、AグループとBグループが入れ替わるようにしている（表1）。

指導対象となるボランティアは65歳大学（地域連携プロジェクト）、港島学童クラブの協力を得て招聘している。陶芸家はろまん工房代表の高野裕二氏を招聘している（図1-3）。また、学生には指導経験の前に基本的なマナーや指導中の配慮について事前に指導を行っている。

Ⅲ　振り返りアンケート結果

実習後の振り返りとして、実習に関する不安と実習後の自身の変化についてアンケート調査を行った。ムードルを用い匿名化の上、研修会等で報告すること、成績には反映されない事、いつでも回答を辞退できる事を伝え、承諾が得られた32名より回答を得た。

実習前の不安では20名（63%）が「はい」と回答し、その内容は、話のきっかけがつかめない（38%）、話題が見つからない（31%）、世代の違う人と話をすることが苦手（16%）、敬語が使えない（3%）があった。実習後の不安については、改善された（41%）、少し改善された（44%）、変化なし（16%）であった（図4）。

実習後の自身の変化については、①どんな年代の人ともうまく付き合える、②人に頼りすぎないようになった、③困難なこと（仕事や勉強）でもやっていこうと思えるようになった、④頼りにできる仲間がいると感じた、⑤家族に何でも話すことができる、⑥学校の教員や職員と話ができる、⑦将来の仕事に役立つと思う、という質問を設け、5件法を用いて回答を得た。半数以上の学生が、とてもそう思う、ややそう思うと回答していた（図5）。

Ⅳ　考察と今後の課題

アンケートの結果は、作業活動学実習Ⅰの指導経験は学生の異世代とのコミュニケーションスキルに対する不安を軽減させることが示唆された。これらの結果から、1. 作業活動の特性、2. レジリエンスの側面、3. 学年間科目との関連と今後の課題について考察する。

1. 作業活動の特性

作業療法で用いられる作業活動は図6のように分類される[2)]。陶芸やフラワーアレンジメントは「遊び・余暇」に分類されるが、指導体験として取り込むことによって、「参加・交流」の要素も加わり、作業活動にともなう効用としては社会的機能として、「共有体験を通したコミュニケーションの成立」という要素がある。また、陶芸やフラワーアレンジメントのような

表1. 実習の構成

A グループ	4限	オリエンテーション	陶芸家デモンストレーション	陶芸実習		高齢者指導体験	活動分析		華道実習		学童指導体験	
	5限											
B グループ	4限	オリエンテーション	活動分析		華道実習		学童指導体験	陶芸家デモンストレーション	陶芸実習		高齢者指導体験	
	5限											

図1. 陶芸家のデモンストレーション

図2. 高齢者への指導経験

図3. 学童へのフラワーアレンジメント指導

作業活動の特性として「創作の楽しさ」もあり、経験値の少ない1年次生にとっては異世代間との交流体験の入り口としては適していたと考える。

2. レジリエンスの側面

レジリエンスとはストレスに打ち勝つ力のことで、近年、心理学のみならず、医療や教育など、多岐に渡る分野で研究が行われている[3)]。祐宗ら[4)]はレジリエンスの因子を、社会性、自己効力感、ソーシャルサポートとし、標準的な心理尺度であるS-H式レジリエンス検査を作成した。実習後の自身の変化に関する質問は、この3因子を参考に設問に取り入れた。アンケートの結果では、全ての質問で半数以上の学生が肯定的に捉えており、レジリエンスの改善にも何らかの改善が得られることが推察された。

3. 学年間科目との関連と今後の課題

最後に、作業療法学科の学年間のコミュニケーションスキル関連の科目との関連を図7に示す。1年次の作業活動学実習Ⅰは2年次の精神系作業療法評価学

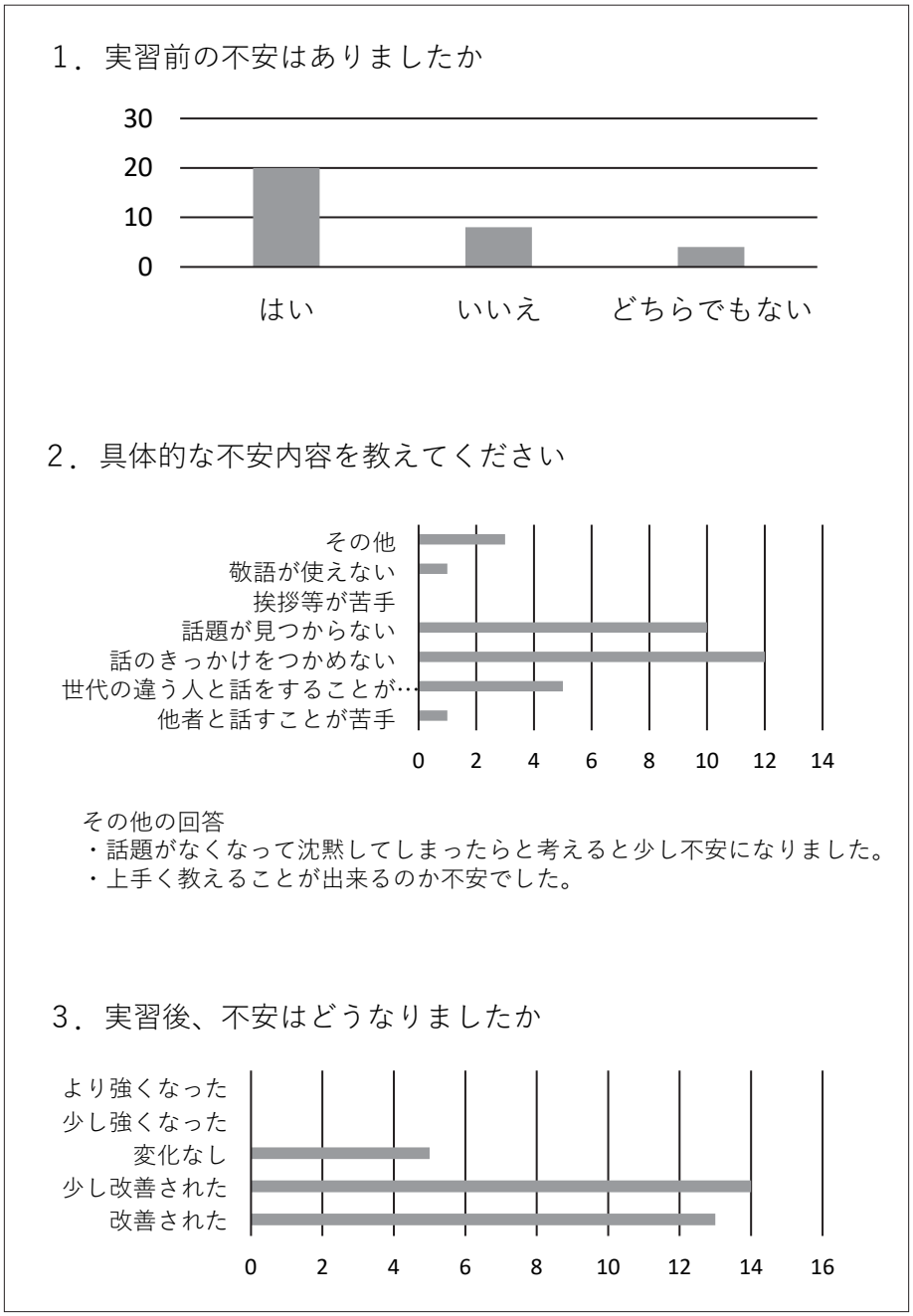

図4. アンケート結果：実習前の不安と内容

（マイクロカウンセリング技法の基礎技法）、3年次の総合実技試験、精神障害治療学実習（面接）との関連づけを意識している。今後の課題として、指導体験後のルーブリック評価等により、自己の行動の振り返りができる評価の作成を考えている。また、今回のアンケート結果から、標準的な指標を用いた経時的レジリエンスの調査と結果のフィードバックを行うことにより、学生のストレスコーピングの指標となりうるものと考える。

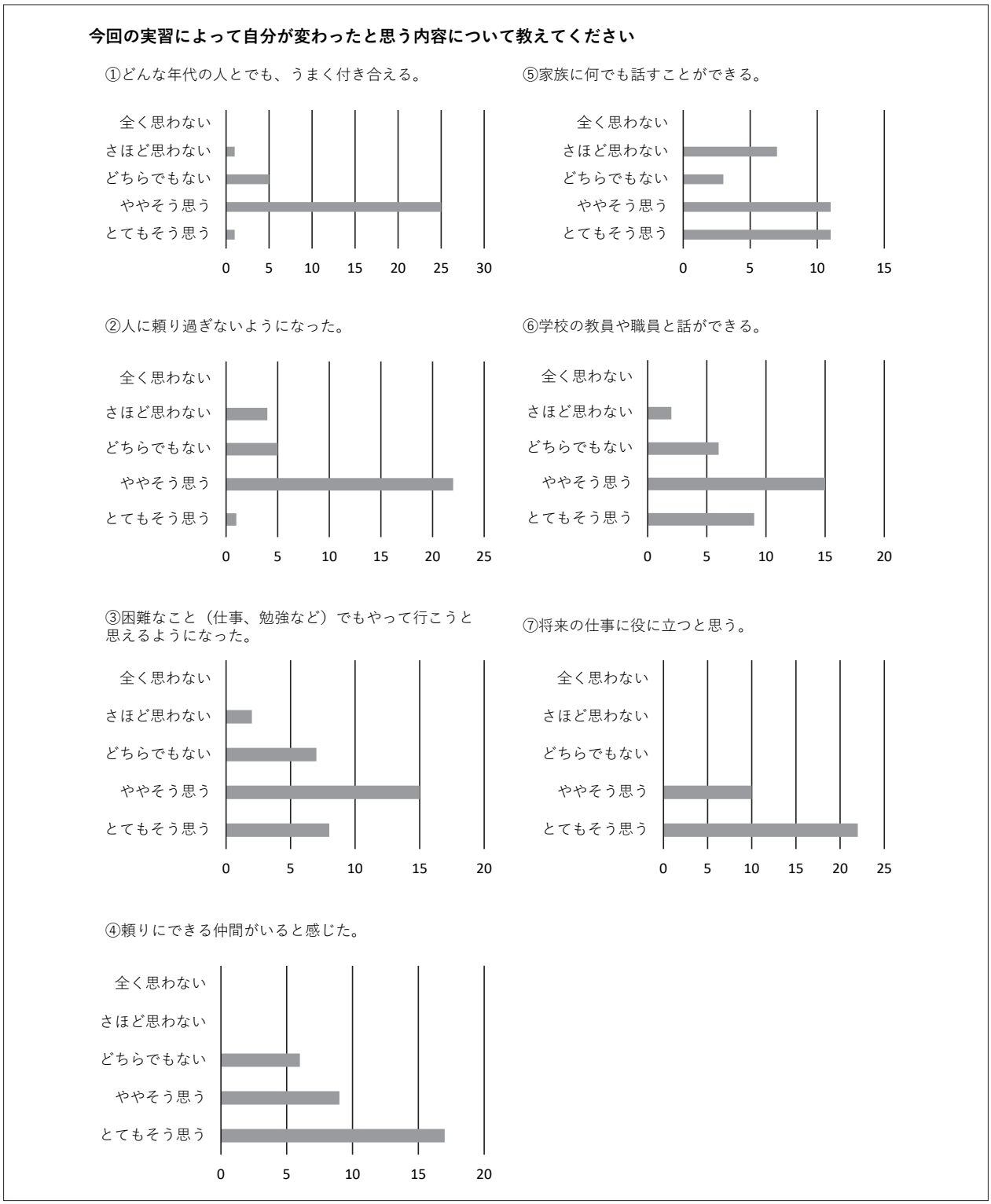

図5. アンケート結果：実習後の自身の変化

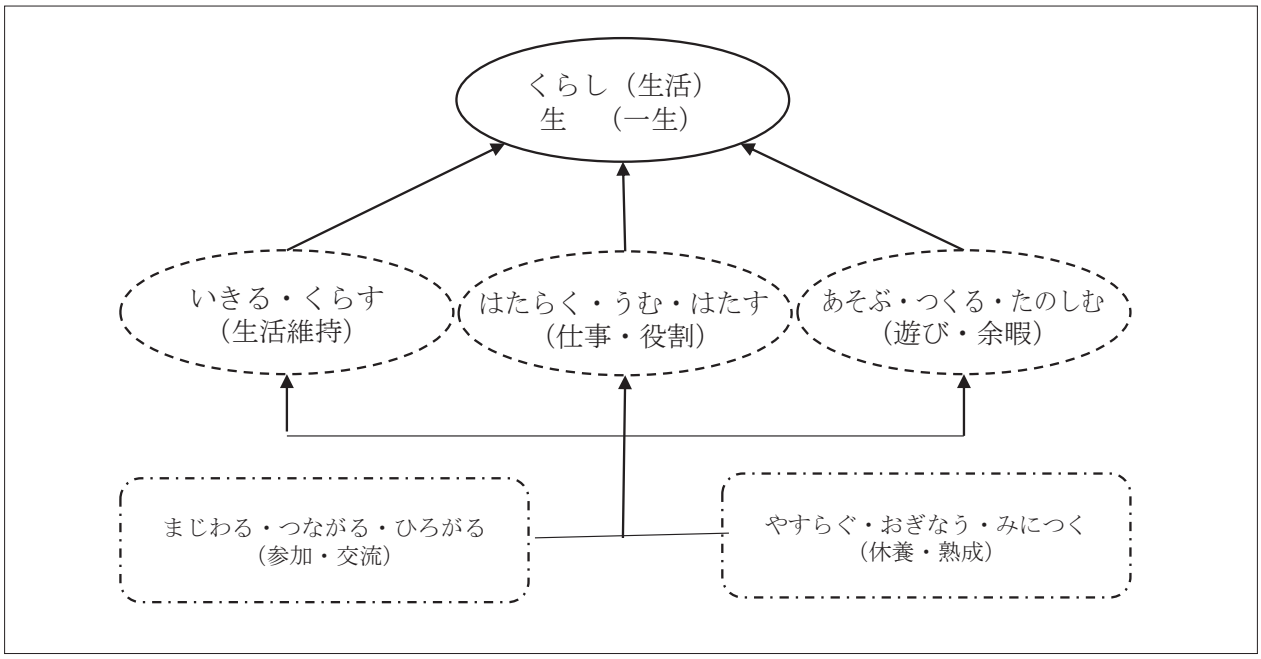

図6. ひとのくらし（生活）と作業活動（山根寛著　ひとと作業・作業活動より引用）

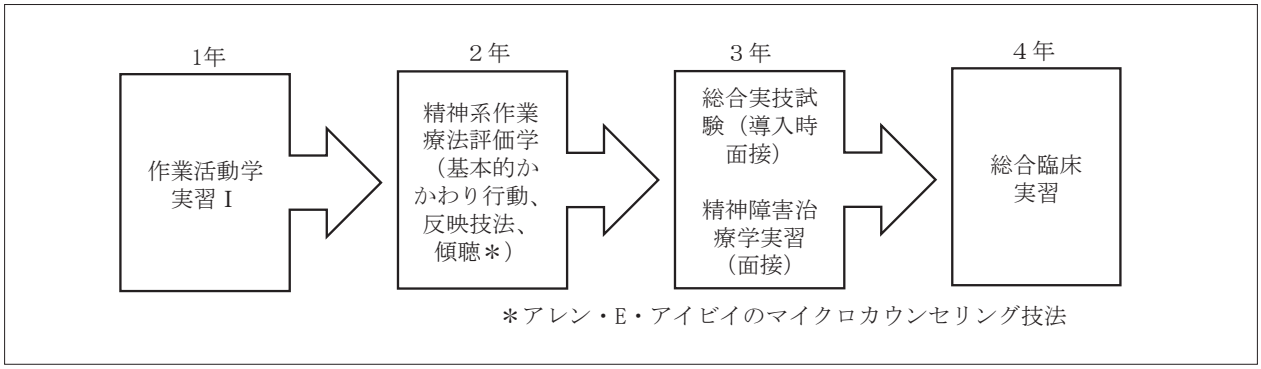

図7. 学年間科目との関連

文献

1）東嶋美佐子,井上桂子,日比野慶子.臨床実習における作業療法学部学生の心理的ストレス反応の変化と性格との関連性. 川崎医療福祉学会誌. 1996, Vol.6, no.1, p.163-168.
2）山根寛. ひとと作業・作業活動. 第2版. 三輪書店, 2005, p.224.
3）齊藤和貴, 岡安孝弘.最近のレジリエンス研究の動向と課題. 明治大学心理社会学研究. 2009, no.4, p.72-84.
4）祐宗省三. S-H式レジリエンス検査. 手引書. 竹井機器工業株式会社, 2007.